

ベルリン日独センターは2019年1月15日にジャズピアニストの高瀬アキさんと小説家で詩人の多和田葉子さんをはじめ5名のアーティストを招いたイベントを開催いたします。本紙は高瀬さんと多和田さんにアーティストとしてのキャリアと、1月のイベントについてお話を伺いました。



© TAKASE Aki &amp; TAWADA Yoko

**編集部:**多和田さんと高瀬さんが知り合ったきっかけを教えてください。いつごろからという経緯で一緒に活動するようになったのですか。

**多和田:**わたしは高校生の時に、フリージャズの好きな早熟な友達がいる、山下洋輔さんのピアノを聴きに行ったりしていました。1982年にドイツに移住してからは、テレビで高瀬さんのコンサートの様子を観たりもしました。1990年代になってからベルリンに住むオーストリア人の作家から、高瀬さんがベルリンに住んでいるようだという噂を聞いていましたが、そんなある日、青木淑子さんという日本人ジャーナリストから「高瀬アキさんと会って何かコラボのようなことをしてみないか」という話がきました。それでベルリンに会いにいき、1999年、北ドイツ放送局(NDR)のラジオ番組で共演したのが最初の二人でやった仕事でした。

**編集部:**お二人ともベルリンに暮らし、ベルリンで活動なさっていますが、その理由は。

**高瀬:**1981年にベルリンジャズフェスティバルに招待されたことが、やがてベルリンに住む弾みになったように思います。当時はまだ壁のあった頃で、日本からモスクワ経由で東ベルリンに飛び、そのあとバスで西ベルリンまで移動したのですが、ひとつの都市が東西に分かれているベルリンにとっても関心を持ちました。1988年にベルリン都市州からオーケストラの作品を書く依頼を受け、その当時オーケストラの音楽監督だった現在の亭主(アレクサンダー・フォン＝シュリッペンバッハ、Alexander SCHLIPPENBACH)に出会い、結果として仕事と結婚の両方を手に入れたことがベルリンで暮らすことになったきっかけです。「Musik ist meine Sprache」(音楽は私の言葉)です。ベルリンに住んでいるとさまざまな言語や音楽、時の変遷が見え聞こえてきます。それらとともに呼吸している生活環境は私にとって作曲したり演奏する上でとても興味深いです。

**多和田:**私は24年間ハンブルクに住んでいたのですが、2006年3月になってベルリンに引っ越しました。ハンブルク時代の友人の多くがドイツ統一後にベルリンに移り住んで

いるので、私にとってベルリンは実はハンブルクでもあるのです。でもハンブルクと違ってベルリンにはフランス、アメリカ、韓国、日本から友人たちがよく仕事や遊びで来るので、拠点というより待ち合わせ場所みたいな感じもします。個人的には昔からポーランドやロシアに関心があったのでベルリンが東欧に近いところが特に気に入っています。私は「脳みその内部」で仕事をしているので、果たして本当に「ベルリンで」仕事をしていると言えるのかどうか怪しいですね。

**編集部:**2019年1月15日にベルリン日独センターで開催される5人の共同イベントに関して、観客はなにを期待できますか。

**高瀬:**第一部はフランス人作曲家のジョルジュ・ビゼー(1838年～1875年)の代表的作品「カルメン」の曲をテーマにオリジナル作品も加えて私(ピアニスト)のほか、中村まゆみさん(オペラ歌手)、ダニエル・エルドマン(Daniel ERDMANN、テナーサクソ奏者)の3人で演奏します。また、友情出演していただくことになりました塩田千春さんのインスタレーションもご披露します。

第二部はこれまで20年近く続いている多和田葉子さんと二人の「言葉と音」のパフォーマンスです。今回はアメリカ人のジョン・ケージ(1912年～1992年、作曲家、詩人、思想家、キノコ研究家)に焦点をあわせ、多和田さんの書き下ろしテキストとオリジナル曲や即興を交えた内容で、音の偶然性やサイレンスなどについて演じます。

19世紀のプロスペル・メリメの小説を基に書いた傑作の集成といえる『カルメン』、作曲家ビゼーのオペラに対する深い情熱に20世紀に代表される現代音楽の作曲家の一人ジョン・ケージ、チャンス・オペレーションや音楽の未来に向けた彼の実験的精神。二人の異なる音楽性を私たちのインタープリテーションを通して、観客が自由な感性で新しい体験をしていただけることを願っています。

**編集部:**今後の予定や抱負についてお聞かせください。

**高瀬:**昨今は老若男女、国籍を問わず、また異なるジャンルのアーティストたちとの交流にとっても興味があります。可能ならこれまで想像していなかった面白い世界を創作していけるような作品を実現させたいと願っています。2019年から新しいグループ「JAPANIC」のCD発売コンサートツアーを皮切りにドイツを始め、欧州で公演します。このグループは今回のカルメン公演でも一緒にパリに住むドイツ人のサクソ奏者ダニエル・エルドマン、またノルウェー人ドラマーのダグ＝マグヌス・ネヴェルゼン(Dag Magnus NAVERSEN)など異なる国籍を持つ若手音楽家たちと一緒にグループです。

そのほかにベルリン在住のダンサー川口ゆいさんと私がこれまでつづけてきたシリーズ「Stadt im Klavier」(ピアノの中に都市がある)の新プロジェクトとして2018年の春にオーストリアでプレミア公演を行なったダンスと音楽のコラボレーション「DA CAPO」(舞踊家:川口ゆい、ガーナ出身のコフィ・ダ・ヴァイブ(Kofie DAVIBE)、演奏家:フランス人クラリネット奏者スクラヴィ(Louis SCLAVIS)、ベルリン生まれのD Jイルヴァイブ(illvibe)と私)があります。2019年からはヨーロッパのみならずアジア、日本での公演も是非実現したいと思っています。

**多和田:**『群像』で新年号から小説を連載します。今年単行本として出版された『地球に散りばめられて』の続編で『星に仄めかされて』というタイトルです。朝日新聞のエッセイ・シリーズ「ベルリン通信」は、来年も書くつもりです。それに加えて再来年あたり、朝日新聞に連載小説を書くことになりそうです。来年3月は国際交流基金の招きでタイとマンマで講演することになっています。マンマの歴史には関心があるので、とても楽しみにしています。

高瀬アキさんとは来年、劇作家ハイナー・ミュラー(1929年～1995年)の作品に取り組んで、東京両国のシアターXの定期公演で上演する予定です。実は大昔ハンブルク大学に提出した修士論文に彼の作品『ハムレットマシーン』について書いたのですが、わたしにとっては彼こそがベルリンを代表する作家でした。